

教科書

Helpman (2004). *The Mystery of Economic Growth*. The Belknap Press (ISBN: 0-674-01572-X)

各自購入してください。まだ購入していない方は本が届くまで、最初の 3 章程度をコピーして持参してください。

Parente and Prescott (2000). *Barriers to Riches*. The MIT Press (ISBN-262-66130-6)

6 月以降に使用します

授業目的

各国の経済成長率を決定する様々な要因を理解します。さらに、なぜ一部の途上国が急速な発展を遂げている一方、他の途上国は依然として先進国との格差が縮まらないのか、その原因について学習します。また、これらを通じて英文の文献を読む・レジюмеを作成する・多人数の前で報告するスキルを身につける事を目指します。

授業の進め方

- ・ Helpman (2004)を参加者で輪読します。章の長さによって、担当人数を調整します。2 人以上で分担する章の場合は、分担者間でどのように全体の報告を行うか調整してください (お互いに他の分担者が担当する部分の内容も知っておくこと)。Helpman (2004)が終わったら Parente and Prescott(2000)から章を選んで読みます。
- ・ 担当者は報告する内容について A4 で 2 枚程度のレジюмеを作成してください。レジюме・資料の出来も成績評価の対象になるので、最初のページの右上に日付と名前を明記すること。授業の前に経済学部資料室(本館 2 階)のカウンターで授業で使用する旨を伝え、「堀井講師」のコピーカードを借りて、教員用のコピー機で必要部数複写して持ってきてください。
- ・ 各担当者の持ち時間は 2 5 分間程度 (最低 2 0 分) とします。プレゼンテーションは、基本的にレジюмеを用いつつテキストの情報をすべて報告する形で行ってください。P.153 以降の notes も含めて説明してください。見慣れない経済用語については P.145 以降の glossary も活用してください。
- ・ 単に全訳するだけでは、わかりやすいプレゼンテーションにはなりません。そのテーマについて予備知識が少ない人にも解るように、少なくとも自分だったら初めて聞いても解るというレベルまで説明をふくらませてください。

- ・ テキストを読んだ範囲で解らないことは、インターネットや学部生向きテキストを調べて補完してください。また、やや難しいですが巻末の参考文献リストにある論文を時にはたどる必要があります。阪大は恵まれていることに、ほとんどの論文が資料室の書庫か資料室の HP の **online journals** のページから入手できます。これらの資料は私のコピーカードを用いて複写して結構です。参加者にレジュメ以外の資料を配ることが説明上有用と判断される場合は、人数分複写してもかまいません。
- ・ プレゼンテーションの最後には、全体のサマリーと、自分自身の感想（日本経済や身の回りの出来事に当てはまるかなど）を述べてプレゼンテーションをまとめてください。複数人での分担の場合は、それぞれの繋がりが解るように十分調整した上で、中間的まとめをしてください。
- ・ 英語の本を自力で読むということもこの授業の目的の一つなので、担当者以外の授業参加者も該当の章を読んできてください。さらに報告を聞き、適宜質問することで、理解を確実にしてください。最後に報告全体を通じた議論をします。決まった正しい答えがあるわけではないので、自信が無くとも積極的に発言してください。全く発言がないと読んできていないと思われるます。

成績評価

- ・ 成績は基本的に報告（2～3回）によって評価する。興味深くわかりやすいプレゼンテーションをし、参加者（講師を含む）の質問にわかりやすく答えられることが高評価となります。
- ・ また、授業中の議論にどれだけ参加できるかも評価の対象です。
- ・ 毎回出席することは当然ですが、やむを得ず欠席する場合は前回の授業時または授業までにメール（horii@econ.osaka-u.ac.jp）で連絡すること。無断欠席が2回以上合った場合は履修を放棄したものとします。万一報告者が欠席せざるを得ない場合は、他の参加者に報告を交代してもらうなど責任を持って対応してください。

その他

- ・ 報告の準備をする上で解らないことが有れば、受講者同士相談するか、講師に質問に来て頂いてもかまいません。
- ・ オフィスアワーは金曜日午後3時から4時ごろまで。研究室は教務の窓口の奥の階段を上がってすぐ右手の部屋です。オフィスアワー以外もメールでの連絡が有れば可能な範囲で対応します。

Helpman (2004). *The Mystery of Economic Growth*.

April 14, 2005 堀井

Chapter 1 Background, pp. 1-8, 1人

- ・ 経済成長はどれほど重要なのか？
- ・ 経済成長率によってどれほどの国際経済格差が発生したか？

Chapter 2 Accumulation, pp. 9-18, 1人

- ・ 経済成長率の差はなぜ生じたか 資本蓄積の差に注目 (Solow model)
- ・ 資本蓄積の差によってどの程度国際格差を説明できるか？

Chapter 3 Productivity, pp. 19-33, 2人

- ・ 経済成長のうち資本蓄積で説明できない部分 生産性の変化
- ・ 生産性をどうやってはかるか？
- ・ 資本蓄積と生産性間の因果関係
- ・ 生産性の国際格差が国際所得格差をどの程度説明するか？

Chapter 4 Innovation, pp. 34-54, 3人

- ・ 生産性がなぜ上昇するか 技術革新
- ・ 内生的経済成長モデル: 2つの考え方
 1. 知識(人的資本)の蓄積 外部性によって成長が維持される
 2. 企業による R&D 活動: 新しい製品の開発、既存製品の質の向上
- ・ 実際に R&D 活動が各国でどの程度差があるのか？
- ・ 外部性 大きい国ほど有利か？
- ・ 大きな技術変化: 短期と長期の効果

Chapter 5 Interdependence, pp. 55-85, 3人

- ・ 経済成長は一国内の出来事ではない
- ・ 貿易の効果
- ・ 知識の国際波及
- ・ 国際競争と R&D
- ・ 実際に貿易開放度と経済成長は関係しているか？
- ・ 国際格差の存在: 知識の国際波及が遅いからか？

Chapter 6 Inequality, pp. 86-110, 3人

- ・ 国際経済格差は拡大した 各国内の所得格差は？
- ・ 経済成長によって不平等度はどのように変化したか
- ・ 不平等は経済成長を阻害するか？
- ・ 不平等の源泉
- ・ 経済成長によって貧困を撲滅できるか？

Chapter 7 Institutions and Politics, pp. 111-144, 3人

- ・ 資本・R&Dの差を考慮しても、実際の国際格差はそれ以上に大きい 制度・政治？
- ・ 歴史的経緯: 産業革命はなぜ起こったか？
- ・ 法制度: フランス流 vs. イギリス流 (どの国の植民地だったか?)
- ・ 地理的条件か? 制度か?
- ・ 民主主義と経済成長